

〔研究論文〕

## 学習意欲を高めるスペイン語授業の一考察

浦 眞佐子

〔Article〕

### A Study of Spanish Language Class for Increasing Motivation for Learning

Masako URA

#### Abstract

This paper is a study of the Spanish Language I class, which is an optional foreign language class offered by the Faculty of International Studies of Bunkyo University. This paper is based on Ura's discussion on studies and consideration conducted in Spanish language classes of several universities in order to increase motivation for learning. In this paper, based on the current state of affairs of the faculty and from a student's perspective, we seek to improve class by giving a clear goal as one complete class instead of taking the Spanish Language I Class as an introductory level class followed by II and III and considering that it is possible to motivate students to learn the Spanish language on a short term basis in one semester.

First, the current state of affairs of the Spanish language class and new orientation is discussed. Orientation of class for increasing motivation for learning is clarified based on previous studies on motivation for learning and surveys of needs of students conducted on the first day of the Spanish Language I Class for 2008 and 2009 as well as the class registration pattern. Next, as a new initiative, we describe the objectives of teaching materials created as well as textbooks and real-world situation in the class. By presenting one piece of teaching material of situational conversation per week, the lesson focuses on "Speak" and "Write", so that a complete set of materials can be provided at the end of one semester.

We considered the learning effect, focusing on the results of student questionnaires conducted at the end of the course and comments made by students and evaluated the class. The course received a high evaluation based on the results of questionnaires and comments by students. In conclusion, it can be said that students were motivated to learn due to an increase in learning time and broader interest in Spanish language.

#### はじめに

文教大学では、国際学部と情報学部の学生を対象に第2外国語<sup>(1)</sup>の一つとしてスペイン語のク

---

(1) 本稿では、第2外国語を英語以外に学習する言語としている。本学では英語も語学の選択科目に含まれているため第2外国語という表現はあまり使われていないが、英語と他の言語を区別するために、第2外国語という表現を使っている。

ラスが開講され、学生は英語を含めた選択科目の中で履修する。第2外国語としては、スペイン語の他、フランス語、ドイツ語、中国語、コリア語があり、学生はⅠからⅢレベルまで半年ごとに最長1年半の授業が履修できる。

現状では、どの第2外国語もⅠを履修する学生が圧倒的に多く、Ⅱを履修する学生はその1/5程度に減少する。この現象はここ数年間変わらない<sup>(2)</sup>。選択授業であればこのような減少はある程度仕方ないと言えるかもしれない。Ⅰの授業は約3か月週2回の初習外国語学習であり、Ⅱ、Ⅲに続ける入門としてシラバスを計画した場合、Ⅰのみの学習で後の学習が続かなければその役割はあまり有効なものにならない。Ⅰでの授業が学生にその言語に対する興味や学習意欲を持たせることが、次のレベルへの学習につなげるために必要である。同時に、Ⅰだけの学習であっても内容が完結していれば、他の形で学習に対する興味を持続することができ、語学を学習した意味があるのではないかと考える。

本稿は、学習意欲を高めるために複数の大学のスペイン語クラスで調査した結果の浦の考察<sup>(3)</sup>をもとに、学部の実状を踏まえて、スペイン語Ⅰの授業をⅡ、Ⅲに続く入門のレベルととらえるだけでなく、一つの完結した授業として明確な目標を与え、1セメスターという短期間のスペイン語の学習であっても、学生の学習意欲を高めようとよりよい授業を追求した論考である。その新しい試みとして2009年度春期の授業を通して得られた学生のアンケート結果および感想を分析し、限られた授業時間で学習の効果がどのようなものであったか考察を行い、大学の現状を踏まえた授業への1つの提案を行うことを目的としている。

構成は、1. スペイン語授業の現状と新たな方向性、において学習意欲に関する先行研究および2008年度と2009年度の当該クラスの授業初日に行ったアンケート調査から、スペイン語授業の学生のニーズや現状を踏まえて学習意欲を高める授業の方向性を明らかにする。2. 新たな試み、において新しく作成した授業の教材および授業の実際について述べる。3. 授業の評価、においてコース終了時の学生へのアンケート結果と学生のコメントの分析および講師による評価から、学習の効果について考察する。4. 結論および今後の課題、とする。

(2) 教育支援課の協力を得て、第2外国語の履修者数を調べていただいた。第2外国語としてのスペイン語と、その他のフランス語、ドイツ語、中国語、コリア語合計の2007年度春期～2009年度春期（5期）の履修者数である。それぞれレベルがⅠ、Ⅱ、Ⅲまでであり、国際学部・情報学部の1～4年生までが対象。（ ）内は国際学部だけの数。

第2外国語履修者数（レベルⅢは、春期のみ開講）

単位：人数

	スペイン語			その他の第2外国語		
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
2007 春期	49 (43)	15 (14)	5 (5)	184 (174)	45 (42)	21 (21)
2007 秋期	45 (39)	15 (15)	—	226 (187)	62 (60)	—
2008 春期	90 (76)	10 (10)	12 (12)	354 (245)	48 (43)	29 (29)
2008 秋期	43 (31)	18 (17)	—	179 (124)	98 (75)	—
2009 春期	89 (67)	9 (5)	7 (7)	401 (265)	32 (27)	35 (33)
5 期合計	316 (256)	67 (61)	24 (24)	1344 (995)	285 (247)	85 (83)

(3) 浦（2010年3月刊行予定）「第2外国語としてのスペイン語の授業を考えるー1年を通じた学生へのアンケート調査から」、『人文研紀要 創刊30周年記念号Ⅱ』第68号、中央大学人文科学研究所。

## 1. スペイン語授業の現状と新たな方向性

まず先行研究では、大学生の学習意欲や学習活動について最近の傾向を述べ、国・私立大学スペイン語11クラスの調査を通して得た学習意欲に関する浦の提案<sup>(3)</sup>を述べる。次に現在筆者が本校で担当しているスペイン語クラスで行ったアンケート調査の結果を比較しながら学生のニーズ分析を行い、学生の履修状況等の現状を踏まえ、スペイン語の授業の新たな方向性を示す。

### 1.1. 先行研究

大学入試センターは2001年から2002年にかけて全国の国公私立大学600学部の33,432人の学生を対象に、大学学部を選択理由、専攻分野への適応度、講義や学習の考え方、職業観、身に付けているスキルや資質等の調査を行った<sup>(4)</sup>。その結果、大学における学習行動はその専攻分野の学問により将来つくことが可能な職業に対する満足度に強く影響される。しかし、仕事の役に立たない講義を受けたくないということではなく、純粋に学問的興味を満たす講座も受講したいという希望のほうが強い傾向にある、と報告をしている。つまり、大学では幅広い知識や教養を身につけようと希望する一方で、パソコンや機械技術、社会問題や自然環境に対し強い関心を持つ。語学への関心はグローバル化の波を受け増加しているが、歴史、人間心理、生物、運動、芸術に比べると一番低い。また、学生たちは自身の学習意欲、講義方法、教材のいずれにも満足していない。講義への出席率は高いものの、講義内容をよく理解できているとはいえない。「講義以外での勉学行動が内容・量ともに非常に低調な傾向がうかがえる」が、教員に対しては「課題の添削を強く望んでいる」。自由回答で「教員の講義方法に向けられた不満の原因の多くは教員の講義に対する熱意のなさによるもの」と指摘している。

外国語の授業で学生がどのような活動を具体的に望んでいるかについて、1993年に中央大学多摩キャンパスで「外国語学習についてのアンケート調査」<sup>(5)</sup>、桜美林大学経済学部では英語必修クラスへの「英語教育に関するアンケート」調査が行われている<sup>(6)</sup>。どちらの結果においても、学生は「会話」の学習を望んでいる。中央大学の調査では、英語以外の外国語の授業に「不満」と「どちらかといえば不満」が54.8%ある。学生は大学の語学の授業の問題点を「進度が早すぎる」19.9%、「説明が分かりにくい」14.3%、「テキストが難しすぎる」12.8%、「授業が一方的である」11.3%の順で挙げている。調査の結果は、教員が学生に求めているものが学生にとっては過剰なのかもしれない、と言及している。一方、桜美林大学経済学部の調査では、教師主導型の授業を望む学生が意外に多い、と報告している。また、会話の指導を困難にしている要因として、クラスの規模などの環境、積極的に発言する学生が少ないなどの学生の消極的態度、日本人英語教師による会話指導に対する否定的見解の3つを挙げ、解決策として「限られた時間内で、教師と学生の能力で達成可能な到達目標の設定」と、「自主的学習の経験のない日本の学生に対しては、教師側の慎重かつ入念な準備と試行錯誤が必要」とであると結論づけている。

(4) 高等教育学力調査研究会 (2002) 『大学生の学習に対する意欲等に関する調査研究』、大学入試センター研究開発部。

(5) 「外国語教育研究」チーム (1994) 「外国語教育に関するアンケート調査報告—1993年度—」、『人文研紀要』第21号、中央大学人文科学研究所、85-236頁。

(6) 松田まゆみ他 (1993) 『発信型英語教育の実践：桜美林大学経済学部の挑戦』、三修社。

学生の学習意欲は、授業が進んでいく間に変化すると考えられる。筆者は国・私立大学の主に経済学部や商学部など、2年間の選択必修のスペイン語11クラスの1年目の学生に対して、学習が進むにつれ学習意欲がどのように変化したか、1年間に3回のアンケート調査を行い、学生の視点からスペイン語の授業の問題点を考察し、学生の学習意欲の変化を明らかにした<sup>(3)</sup>。

アンケートの分析結果から、学生は大学のスペイン語の授業の中で「会話」はしたいものの「文法・語彙」の理解に追われていること、限られた授業時間では会話練習に時間をかけられない状況が多いこと、当初の学生の目的が試験のための学習に取って代わられて学習意欲が高められなくなったこと、そのため理解が乏しくても学習時間が増加しないこと、など授業に対する興味不足、学習意欲の減退が観察され、その要因が明らかになった。一方で、経験した教室での活動から、学生はロールプレイなど実際の状況に近い設定での学習方法は、学習の役に立つ楽しい活動であると認識している。また、文法が理解できれば、「会話」だけでなく他の活動にも興味は広がることが観察された。

そこで、学習意欲を高めるための具体的な方策として、いくつかの提案を行った。すなわち、一つの文法項目でも初級・中級・上級レベルで扱う内容を徐々に高めていくこと、単なる知識の集積ではなく、「経験する」「推論する」<sup>(7)</sup>という積極的な学習行動でスキルを高めることから次の学習意欲に繋げること、具体的に到達可能なゴールを学生に与えること、などを挙げた。教える側も教わる側も大学で初習の言語は、まず文法的知識が必要であると考えている。しかし、どこの大学でも第2外国語の学習に十分な時間は与えられていない。授業はどうしても文法の学習に時間を取られてしまう。このような状況であっても、実際に近い設定をした会話練習を通して、使いながら覚えていくことで学習が実感できるような行動主義的な方法の学習は、学生のニーズにも答え、学習意欲を高める授業ができるのではないかと、この見解を示した。

## 1.2. 学生の視点と新たな方向性

本学部でスペイン語を履修する学生の視点を捉え、新たな方向性を探るために、2008、2009年度春期の授業当初に、学生の学習動機、希望する学習分野、学習時間等についてアンケート調査をし<sup>(8)</sup>、ニーズ分析を行った。アンケートは授業初日のオリエンテーションで、教師から授業についての説明をする前に行っている。対象者は両年度に担当したスペイン語Ⅰの各2クラス、1～4年の学生で2008年度は79名、2009年度は76名である。

学習動機としてスペイン語を選択した理由（複数回答）は、両年度とも「スペイン中南米に興味

(7) 「経験する」「推論する」という言葉は、土屋（1994）の引用である。土屋は、まず英語指導の3つの原則として「音声の重視」「経験の重視」「推論の重視」を挙げている。そして、英語学習のための5つの原則として、この3原則に加え、「広く世界の出来事に関心を持ち、常識を養うこと」「物事について深く考え、自分の主張を明確にすること」を抽出した、と述べている。この2種の原則は互いに相補的な関係にあり、その根底にある「学習プロセスの重視」「学習者における気づきの重視」の原理に支えられている、と述べている。つまり、積極的な学習行動をするためには、「語彙や文法の知識をふやすだけでなく、英語そのものを経験すること」「自分の持っている言語や世界についての知識を動員し、大胆に推論すること」が、英語だけでなく他の言語の学習にも必要であると考えられる。

土屋澄男(1994)「英語学習の5つの原則」、『現代英語教育の諸相—伊藤健三先生喜寿記念論文集』、研究社出版、97-104頁。

(8) 巻末資料1の第1回アンケート集計結果〔抜粋〕を参照

がある」「将来役に立つ」が第1,2である(図1)。第3は2008年度が「旅行・留学がしたい」であり、2009年度では「話者が多い」が第2と同数である。2008年度と比較すると、2009年度では「易しい」が多く、多少選択が消極的な理由に傾いている。「単位取得のため」は消極的であるものの学生にとって本来最大の理由かもしれないが、その理由でスペイン語を選択したとする学生は全体からみると多くない。「単位」のみ、または「単位」と「易しい」を理由にした学生は、両年度とも4名ずつであった。

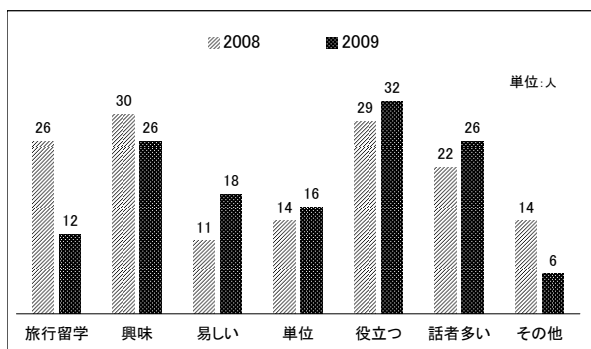


図1 ス페인語を選択した理由 (2008, 2009)

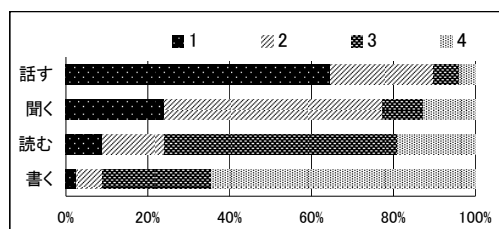


図2 重点をおいて勉強したい技能 (2008)

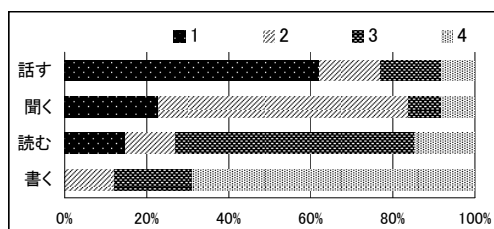


図3 重点をおいて勉強したい技能 (2009)

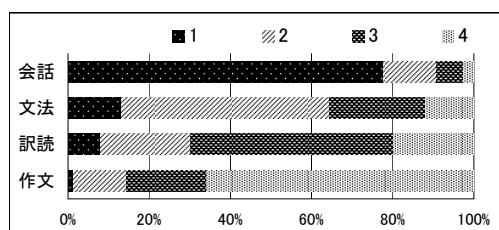


図4 重点をおいてほしい活動分野 (2008)

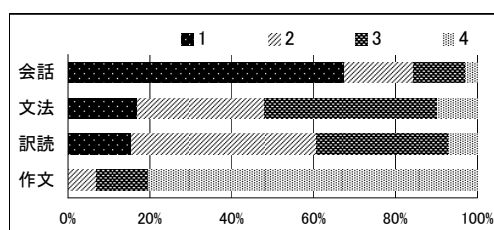


図5 重点をおいてほしい活動分野 (2009)

言語学習のための4技能「話す」「聞く」「読む」「書く」のうちどの技能に重点をおいた勉強を希望するかの質問に、ほとんどの学生が「話す」「聞く」を第1,2としている(図2,3)。また、授業でどの活動に重点をおいてほしいかの質問には「会話」が第1である。第2に希望した活動は2008年度と2009年度で多少異なる(図4,5)。2009年度で「訳読」を第2にした学生が多くなっている。難しい「文法」を避けた結果ではないかと思われる、ここでも2008年度に比べ消極的な様子がうかがえる。

授業以外の学習時間については、まだ勉強を始めていないが、学生のモチベーションの表れとして判断できよう<sup>(9)</sup>。両年度とも「宿題と試験前」が最も多い。前日予習復習や毎日勉強するという学生は2008年度のほうが多い(図6)が、2008年度のほうが多少積極的だからであろう。

このように、2008年度と2009年度の学生を比較すると、当初に学生から示された学習意欲の点で多少の差はあるが、スペイン語の選択理由や授業の活動の希望からみて、両年度の学生ともスペイン語を使ってみたいと思っていると判断してよいであろう。これはどの年度の学生にも共通して

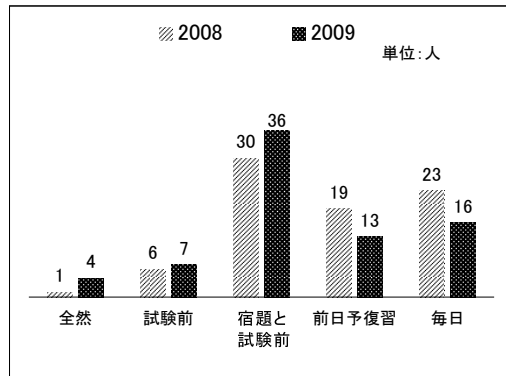


図6 授業以外の学習時間 (第1回)

いると考える。このような結果は、筆者の他大学での調査においても同様であるが、本学で調査した学生のほうが「会話」をしたいという希望が若干多く、「文法」の学習を希望する者は若干少ない。対象の学生が国際学部、情報学部の学生であることを考えると、学生の興味が広く海外にも向いていることは事実であろう<sup>(10)</sup>。学生の視点が語学を単なる知識として身につけるのではなく、実学として学習言語が使えるように、「会話」の学習を通し身近なコミュニケーション能力を身につけたいという方向に向いているのは当然のことであると考察できる。

一方、語学の履修状況はどの言語もⅠレベルが圧倒的に多く、Ⅱ、Ⅲはかなり減少する。この状況は、授業が選択科目であれば上のレベルへと減少するのは当然であるのかもしれない。泉水<sup>(11)</sup>は、第2外国語を選択科目化することで履修者が激減する現状について、選択科目にすることから学生は「楽な方へ楽な方へと流れる結果に終わるだけ」として捉えている。そのように流れる学生がいることは否定できない。また、カリキュラム編成上の理由も考えられるようではある。しかし、学生が複数の言語に興味を持ち、いろいろな言語に触れいつか使ってみたいと考えていると捉えてもよいのではないかと。実際、国際学部では国内外のボランティア活動に対する単位認定を行っている。また、三木<sup>(12)</sup>は湘南校舎就職委員長の経験からも、学生が「社会に出て、仕事で求められるものは社会人としての基礎能力であり」、そのひとつの能力として「グローバルな視野」を挙げ、学生の異文化適応能力や異文化間コミュニケーション能力の重要性を述べている。グローバルな場面において異文化間適応能力を高める一助が1セメスターの授業でもできるのではないかとと思う。

(9) (3)の拙論の中でも同様の質問を行った。その分析では、授業初日に行ったアンケートの結果に比べ実際に授業が始まってからのアンケート結果では学習時間が減っている。学習内容、特に文法の学習が難しくなると学生が思っているものの学習時間が増加しておらず、学生の興味が授業にはなくなっているのではないかと判断した。学習時間の変化は授業に対するモチベーションの表れであると考えられる。

(10) 春期の学生には少ないが、秋期の学生にはⅠのクラスでもすでに他の言語を履修している学生が全体の1/4ほどを占める。また、4年生にはこの言語の履修が卒業単位にかかわるものか質問しておくことにしているが、毎回半数はすでに履修単位を満たしている。正確な数字は不明だが、他の言語の状況も同様ではないかと推測できる。学部全体として学生はいろいろな言語に興味があると考えられる。

(11) 泉水浩隆(2009)「日本(の大学)における第2外国語をめぐる現状と課題—スペイン語教育を中心に—」、『学苑』第821号、昭和女子大学、47頁。

(12) 三木佳光(2007)「モラトリアムを続ける若者の意識とキャリア支援策(その3)」、『国際学部紀要』第17巻2号、文教大学国際学部、53頁。

1セメスターの授業で行える内容は、初級程度のコミュニケーション能力のレベルをも満たすものではないだろう<sup>(13)</sup>。しかし、初級の初級であっても、学生が将来何らかの形で異文化との接触場面に役立つことを前提に授業のシラバスを考え、Iレベルの授業に具体的で完結できる目標設定を挙げる方法もある。学生の履修状況の現実を肯定的に捉え、少ない授業数でも有効に行える授業を作り上げることが必要であると考えます。

## 2. 新たな試み

大学の現状を踏まえて、場面会話の練習を多く取り入れた授業を2009年度春期に試みた。一つの完結した授業として、場面会話を活用すれば自己紹介が行えるという具体的な目標を学生に与え、使いながら覚えられるような授業運営を考えた。期間は短いですが、その期間内での学習意欲を高める目的だけでなく、授業終了後も何らかの形で学習意欲が継続できるように授業は進められた。

### 2.1. 授業のねらい

#### 2.1.1. 文法シラバスと場面会話

初習の外国語であるので、その言語を使うためにある程度の文法知識を語彙や表現とともに理解し覚えなければならない。従来のように文法を段階的に学習することも必要であると考えます。特に日本人の学生を対象にした場合は文法を無視することはできない<sup>(14)</sup>。使用しているテキストも文法シラバスで構成されている<sup>(15)</sup>。

学生にとって役に立つ「会話」を考えた場合、旅行等に使える買い物や道案内などの場面シラバ

(13) 一般的に大学でスペイン語を教えている教師は直説法までを初級とし、週2回の授業で1年から一年半をその期間として考えているようである。江澤(2007)は、このレベル判断は文法の学習を中心にした場合であり、スペインにおける外国語としてのスペイン語教育のレベルとは一致していないこと、また日本の大学では文法知識以外の能力とのバランスがとれていないことなどを指摘している。

江澤照美(2007)「ヨーロッパ言語共通参照枠(MCER)と日本の大学におけるスペイン語教育—読解授業と教材—」、『愛知県立大学外国語学部紀要』39(言語・文学編)、133-157頁。

筆者が担当するクラスでも、週2回の授業でI～IIIの学習を終了すると、ほぼ直説法の学習が終わるが、コミュニケーション能力はあまり身につけていないと思える。

(14) 例えば、慶応大学湘南藤沢キャンパス(SFC)のスペイン語初習クラスでは「使えるスペイン語」を目指し、場面機能シラバスに基づく教材を使って文法が導入され、当初から接続法の動詞形や命令形が導入されているが、この導入方法は海外での語学学習体験がある学生にとってはあまり難しい方法ではない。実際、SFCのスペイン語履修学生の30%は帰国生である。しかし、日本の中学、高校で英語を学習してきた学生にとって、場面機能シラバスは相当の負担があると考えます。アリスティムニョ(2004)は、ネイティブのスペイン語教師として、コミュニカティブ教授法がコミュニケーションのための適切な教授法であるとしながらも、欧米で発達した教授法を日本の大学でそのまま適用しても、欧米での実践と同じ結果は得られないだろうと指摘する。東アジアの大部分では伝統的な文法訳読法が好んで使われているからである。筆者も通常は文法シラバスをベースに授業を進めたほうがよいと考える。

寺田裕子(2005)「スペイン語—教材・教授法・試験・評価方法・学外活動」、『外国語教育のリ・デザイン』、慶應義塾大学出版会、105～116頁。

イグナシオ・アリスティムニョ(2004)「外国語としてのスペイン語教授法—欧米と東アジアにおけるその発展と応用について—」、『ポリグロシア』9、立命館アジア太平洋大学、49-56頁。

(15) クラスで使用しているテキストは、浦他著(2005)『Hablemos en español(いっしょに話してみませんか?)』、同学社。大学でのスペイン語初習者を対象にしており、文法シラバスを採用している。

スの会話の学習も一方法であるのかもしれない。しかし、将来グローバルな場でスペイン語を使う場合、例えばボランティア活動などの場面も考え、周囲の人々とのコミュニケーションをとる方法として自分や自分の周囲のことについて話したり、相手のことについて聞いたりできる会話が有用であるのではないかと考えた。そして、単に口頭でできるだけでなく、文章が書け形としても残るとい目標も付け加えた。

そこで、スペイン語 I の明確な目標を、自己紹介ができ家族のことや自分の好み等が言える、相手にも同様のことを質問できるまでを「話すこと」を中心に「書くこと」も学習する、とした。従って、従来の文法的なシラバスに加え、会話場面を想定して場面会話の教材を準備した<sup>(16)</sup>。表 1 は文法シラバスに合わせて作られた場面会話の一覧である。試験や予備の週もあるので、10 週分にまとめてある。

表 1 スペイン語 I で使われた文法項目と会話の場面一覧 (課の数字はテキストに一致)

週	課	文法項目	場面会話
1	0	発音、アクセント、読みの規則、挨拶	初対面 (大学で) 1
2	1	estar 動詞、疑問文、llamarse	初対面 (大学で) 2
3	2	ser 動詞、名詞、形容詞の性数一致	友人の紹介、職業や出身地について話す
4	3	規則動詞 - AR、直接目的格代名詞	友人と大学での勉強やバイトの話をする
5	4	規則動詞 - IR、付加疑問文、副詞 (句)	家族との生活やコミュニケーションの取り方
6	5-1	不規則動詞、tener の用法	家族、兄弟のことや誕生日を話す
7	5-2	tener、hacer の用法、時間表現	バス乗り場でバスを待つ
8	6	規則動詞 - ER、動詞 ir、ir a + 不定形	留学と旅行の話
9	7	語根母音変化動詞、querer、poder	夏休みの計画
10	9	gustar 等の使い方、依頼表現	好み、趣味

### 2. 1. 2. 各課の場面会話の構成と授業の進め方

各課の場面会話はテキストに合わせた文法項目を入れて、学生 A,B の会話が 4 往復する程度で一つの場面を構成している。語彙数は 1 週で約 20 語、それぞれの場面に適した使用頻度が高いと思われる語である<sup>(17)</sup>。10 回の場面会話学習で約 200 語を学習する。これらの語彙は使用語彙であるので、学生は暗記しておかなければならない。

文法の理解に関しては、文法の解説を最低限の時間と内容にするために、各文法項目を最低 1 つの会話パターン例として場面会話に入れ、簡単な解説の後、口頭練習によりその会話パターンを確

(16) 巻末資料 2 を参照。テキストのほかに、毎週プリント教材として場面会話・語彙とそれぞれの日本語訳が準備されている。

(17) 使用頻度が高いと思われる語彙は、テキストとの整合性を含め、筆者のこれまでの経験から選んだ。



実に覚えるようにした。つまり、入門期の学習なので文法にかかわる1例を記憶にとどめることを必要最低限とし、つまり、学生がより展開した形を学習したければ、テキストを読みながら自分で補えるようにした。学生は自分で運用しながらスペイン語に慣れて使えるようにするのが第一段階であり、学生自身が見つけ出した疑問や興味を自らテキストを読むことで解決することが次の段階である。教師の解説は一方的に詳しくしすぎないように配慮した。学生は文法項目をその後の学習によって広く展開できるように覚えておくことが大切であり、文法の難しさでスペイン語への興味がそがないように、次の段階への学習に興味を繋がるのがこの段階では必要であると考えたからである<sup>(18)</sup>。

この場面会話は、学生が質問する立場にも答える立場にもなることができるように、すべての会話を暗記することを前提とした。初級の段階で会話をする場合は多くのストラテジーを使えないので、語彙や表現を確実に覚えていなければ会話は進まない。スペイン語の発音は英語などに比べ日本人にとってあまり難しいものではない。授業では多く発話をする中で、学生が互いに話し、聞く機会を十分に持ち理解も深まり覚えることもできる。一方、書いて覚えることも重要で、授業以外での学習時間が必要となることも学生に自覚してもらわなければならない。場面会話の表現を自分なりに構成すれば、自己紹介文として話すことも書くことも可能になる。ただし書くことは作文としての体裁までを要求していない。

週2回の授業を2人の講師がそれぞれ受け持つため、一つの場面会話を1週間で学習できるように授業を分担した。講師A(筆者)は、主に導入と解説、簡単な展開および書きによる確認、講師Bは各週の講師Aの導入を受けて、展開と応用練習、口頭による確認である。

## 2.2. 授業の実際

毎週の授業の流れは、講師Aによる、前週の復習小テストと答え合わせ、新しい課の場面説明と場面会話紹介、文法解説、新しい語彙導入を行いながらのパターン練習、場面会話の全体での練習、宿題指示、で1課分の前半の授業が終了する。講師Aの授業では学生に常にスペイン語を声に出して発話することを要求した。全員で行う場合でも、個々に質問する形でも相手を見ながら発話することで暗記を促す<sup>(19)</sup>。文法解説は20分程度だが、その間もメタ言語で文法を説明するのではなく例を出し学生各々が質問に答える形で理解を促し、会話パターンを聞くことと発話することを繰り返した。

後半は講師Bが担当し、動詞の活用変化など応用した会話練習を行った。宿題として覚えた語彙を使った会話パターンを講師Bが作成した練習用プリントで補い、学生をペアにしてすべての学生に場面会話の暗記を促した。従って、講師Aの授業の後学生は講師Bの授業までに語彙や場面会話を暗記しておかなければならず、どちらの授業でも講師は宿題や小テストなどによる毎週の

(18) (3) の拙論の調査結果でも、「文法」の学習の難しさが学生の興味をそいでいる傾向がみられる。その対策として、一つの文法項目でも段階を追って、入門、初級、中級と徐々に学習することを提案している。

(19) 学生は発話する際、どうしてもスペイン語を見ることに頼る。授業中は講師の顔や話す相手の顔を見て発話するように再三注意をしなければならなかった。第3課から場面会話全体の日本語訳だけをロールプレイ用として作成し、場面会話プリントの裏面を利用して配布した。この裏面は、学生が口頭練習で繰り返し覚えた会話のパターンを一つの流れに沿った場面会話につなげた後に使用した。これは、学生が会話の流れを忘れた場合に見るため、日本語で書かれたものを訳して発話するという目的ではない。

確認作業を充実させた。

学生の成績評価は、中間・期末共に場面会話の筆記試験、自己紹介文を書くこと、学生をペアにしての場面会話と講師の質問に答える口頭試験とし、毎授業の小テストやペアによる口頭での会話も成績に加えている。

### 3. 授業の評価

#### 3.1. 評価の方法

2008、2009年度ともに最終日に第2回アンケートを行った。2008年度と2009年度のアンケートの内容は若干異なっている<sup>(20)</sup>。2009年度のアンケートは最後に自由回答欄を設けた。全体の88.5%、69人からコメントを得ることができ、より具体的な学生の思いが伝わった。それぞれのアンケート結果とコメントの分析からこの授業の試みを評価したい。3.2.では両年度の第2回のアンケートでの同じ質問項目の結果を比較する。3.3.では2009年度の第2回アンケートでのみ質問した結果を考察する。3.4.ではコメントの分析。3.5.では総合評価として、講師からみた授業の評価を加え、この試みの学習効果について述べる。

第2回アンケートの回答者数は、2008年度69名、2009年度78名である。

#### 3.2. 2008、2009年度の第2回アンケート結果の比較

スペイン語の授業が難しかったかの回答は、両年度ともに「難しい」が圧倒的に多い(図7)。しかし「難しくない」が2009年度で増加している。どの分野が難しかったかの質問には、両年度とも「文法」と答えたものが最も多い(図8)。また、2009年度では語彙や会話の暗記を強く指導したため「語彙」「会話」が多くなっている。2009年度は「文法」の学習に極力基本だけを教えるようにした。授業が「難しくない」という学生も増加している。学生は授業が難しいというのではなく、スペイン語の「文法」や「語彙」が難しいと答えているのではないだろうか。これについては教材の理解度のところで再度検討する。

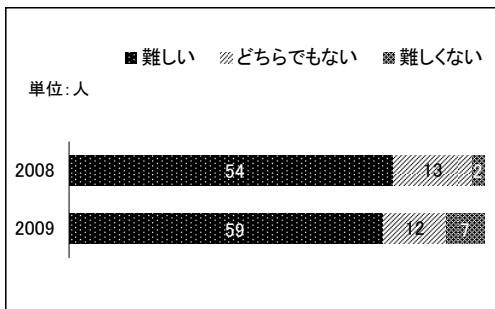


図7 スペイン語の授業は難しかったか

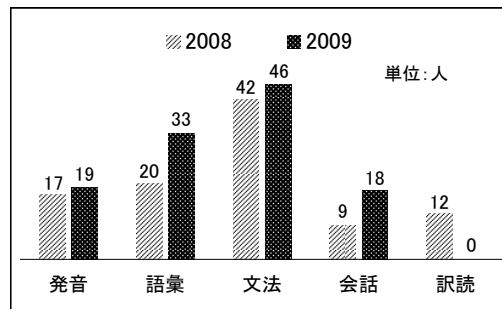


図8 どの分野が難しかったか

(20) 巻末資料1の第2回アンケート集計結果A、B〔抜粋〕を参照。

授業以外の学習時間では、両年度の間で違いがある(図9)。図6の授業初日に質問したグラフとも比較する。2008年度の第2回の実際の学習時間は筆者の他大学のアンケート結果同様、宿題は良くするが予習復習まではしない<sup>(21)</sup>。2009年度の学生は、宿題だけでなく予習復習としての学習を前日または毎日行った学生が増加している。2008年度に比べ、第2回の実際の学習時間が全体として増加しているのが分かる。これは、授業で毎回小テストを行った結果であると考えられるが、この小テストは2009年度のみ実施したため、学生がどのように考えていたかについては次の項で詳しく述べる。

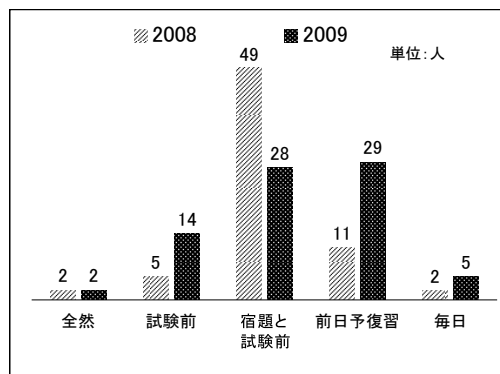


図9 授業以外の学習時間 (第2回)

これからの授業でもっと勉強したい活動分野では、2008年度では第1回の重点をおいてほしい活動分野と比較して「会話」「文法」で変化がみられた(図4, 10)。「会話」を1番目にした数の一部がほぼ「文法」を1番目にした数に移行した。学習を進めるうちに「会話」を学習するためには「文法」の知識が必要であると感じたのだろう。試験には必ず文法に関する問題が出題されることから、試験のためにも「文法」の学習が必要だと感じたとも考えられる。2009年度は前年のように「会話」から「文法」への移行はみられない。試験に文法に関する問題、例えば動詞の活用形や冠詞、前置詞などの穴埋め、完成問題のような出題は行っていない。会話文の中で文法項目の確認を行っている。従って、2009年度の第2回で「文法」を2番目にした数が増加したのは、「文法」の知識が「会話」の学習に必要であると判断した、と言える(図5, 11)。2009年度で注目したいのが「作文」である。「作文」は、毎回4番目が圧倒的に多い。2008年度では第2回で1番目におく学生が消え、わずかだが3、4番目が増加した。しかし、2009年度では1番目におく学生が現れ、4番目がはっきりと減少した。これは場面会話から自己紹介文を書く事を課題にした結果、書いたことの経験が自信や興味に繋がったからだろう<sup>(22)</sup>。訳読は一切行わなかったために3、4番目にした学生が増加した。

4回のアンケートの回答から、学生の勉強したい活動が「会話」であるのは変わらない。学習時間からも明らかなように2009年度の授業では、「会話」を学習するための課題が毎週多くあった。それにもかかわらず、2009年度第2回のアンケート結果でも、希望する活動分野として「会話」が減少していない。このことは、学生がこの授業方法を受け入れたと捉える事ができよう。

(21) 大学入試センターが全国規模で行ったアンケート調査結果でも、大学生の自宅での学習時間が非常に乏しいものの、授業の出席率や宿題をやってくることは高い数値が出ている。

(22) 期末試験では、この自己紹介文を40/100点として出題した。希望者には事前に添削を行っているが、試験では持ち込み等はなく覚えてきたものを書かせた。

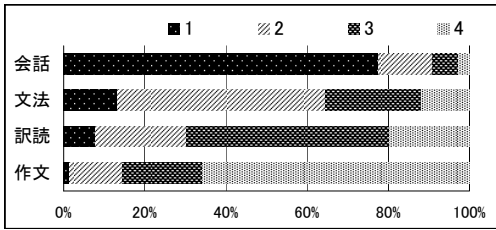


図4 重点をおいてほしい活動分野(2008、第1回)

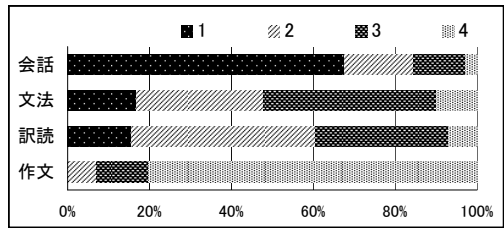


図5 重点をおいてほしい活動分野(2009、第1回)

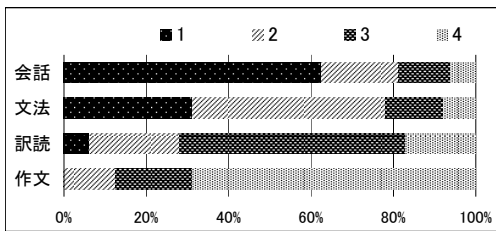


図10 もっと勉強したい活動分野(2008、第2回)

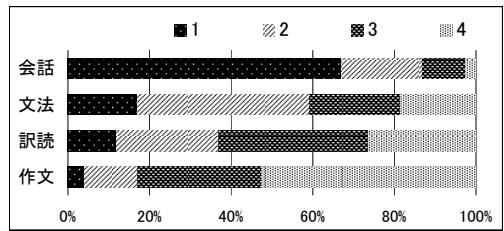


図11 もっと勉強したい活動分野(2009、第2回)

### 3.3. 2009年度の第2回アンケートでのみ質問した結果の考察

2008年度で行わず、2009年度の第2回アンケートでのみ行った質問は、場面会話の教材、文法説明とテキスト使用、小テストに関しておよび学習に対する興味の増減である。

場面会話の教材については、4段階評価で面白い3.29、役に立つ3.68、理解できた3.14と高い評価であったと言えるだろう。しかし、11名14.1%の学生から旅行や日常等に使える会話が学習したかったという意見もあった。

文法説明については、「ちょうどよい」が半数を超えているが、少ないと感じた学生も22名28.2%いた。予習復習へのテキストの使用は「使った」学生が9名11.5%であった。学習時間の予習復習には主に場面会話教材を使い、語彙や会話の暗記に費やされた様子が分かる。テキストの解説が学生の文法の理解にあまり役立なかったと考察できる。テキストの内容や解説の方法の再考が必要かと思われる。

場面会話教材の結果と文法説明の結果を考え合わせると、授業の内容は難しいものではなかったと判断できる。前項で2009年度の学生もスペイン語の授業が「難しい」と答えた学生が多いと言及したが、これはスペイン語という言語の学習が難しいという回答であると考察できる。今まで学習してきた英語とは異なった文法体系を持つ言語の学習が難しいのである。

学習した語彙、会話文の分量についても質問した。この2問は5段階評価で、語彙は48名61.5%、会話文は49名62.8%が「多い、少し多い」と回答している。「ちょっと少ない、少ない」

は語彙では4名、会話文では0名でかなり多いと感じているようである。しかし、これらの語彙や会話文について毎週小テストを行ったが、この小テストを実施したことへの回答は、「良かった」が24名、「初めはいやだったが慣れた」が27名で合計51名65.4%、「嫌だ」が22名、「すぐ忘れるので意味がない」が3名で合計25名32.1%であり、肯定的に捉えている学生が否定的に捉えている学生の2倍であった。学生にとってテストはあまり好ましいものではないと予想していたが、この小テストが学習意欲を高める刺激になったと言える。

1セメスターを終えて、スペイン語に対する興味に変化があったか質問した。選択肢は5つで、「初めから興味がある」32名41.0%、「もっと興味がわいてきた」34名43.6%、「初めと変わらない」7名9.0%、「初めより興味がなくなった」5名6.4%、「初めから興味がない」0名であった。43.6%の学生が興味の増加を示したことは、この授業が学生にある程度の満足を与えたことを示していると判断できる。「初めと変わらない」「初めより興味がなくなった」学生は、場面会話が理解できないと思っていることや文法の説明が不足していると思う割合が平均値より高く、授業が理解できないと興味が損なわれることを示していると思われる。

### 3.4. コメントの分析

69人から得られたコメントは、授業の感想だけでなく自身の反省や今後の学習意欲、授業や教師に対する要望など多岐にわたる。それぞれのコメントから内容を6項目に分類、集約した。

- ① 授業に対する感想 (87) — プラス評価 (52)、マイナス評価 (34)、要望 (1)
- ② 教師に対する意見 (21) — 感謝 (8)、満足 (6)、不満 (5)、単位要求 (2)
- ③ 学生自身の感想や反省 (8) — 反省 (3)、褒める (2)、次への誓い (3)
- ④ 勉強のし方に対する気づき (19) — テスト宿題 (13)、発話 (4)、その他 (2)
- ⑤ 学習意欲の変化 (21) — 興味の広がり (12)、Ⅱ受講希望 (5)、意欲減退 (4)
- ⑥ スペイン語に対する感想 (5) — 難しい (4)、易しい (1)

①授業に対する感想は、プラス評価の中では「楽しい・面白い」が25、「受講して良かった」15、「分かりやすい」が5、等である。マイナス評価の中では「小テスト・宿題が多くて大変」が17、「文法説明不足・説明が早すぎる」が7、「授業が難しかった」が5、等である。マイナス評価34のうち、28は同時にプラス評価もしている。コメントがない学生がいるが、52人66.7%の学生が授業を良かったと評価しているが、その半分は「大変だったが、楽しかった」という評価である。話すためには覚えなければならないが、話せれば楽しい。話すことを経験したことに対する評価である。

②教師に対する意見の中で、満足は、講師が学生と一緒に会話を繰り返したり、学生を励ましたりなど、講師の熱意が伝わったことに関するものである。不満は、文法の説明が早口であること、2人の講師の教え方の違いの指摘であった。

③学生自身の感想や反省では、「授業は大変だったがよく頑張った」という自分への褒めがあるが、あまり勉強しなかったので「次は頑張りたい」という反省もみられた。

④勉強のし方に対する気づきでは、宿題や毎週のテストによって自然に力をつけることができたことに気づいたコメントが多かった。また、教室内での発話が記憶にも運用にも大切であることを認識したようである。

⑤学習意欲の変化で、興味の広がりとは「ぜひスペインへ行ってみたい」「少し知っているだけでweb動画サイトや南米のサッカーの文字にひかれ、調べてみた」「これから勉強していくきっかけができ、自分でテキストを買って勉強しようと思った」などのコメントである。意欲の減退は、「覚

えることや理解が難しくなった」ことが理由である。

⑥スペイン語に対する感想は、スペイン語の学習またはスペイン語が難しいというコメントと、スペイン語の発音は易しいというコメントである。

これらのコメントからは、宿題や小テストが学生にとってかなりの負担だったことが想像できる。しかし、会話を学習するためには発話することや書くことが重要で、宿題や小テストが有効だったことに気づき、その負担が必ずしもマイナスに働くことはなく、学生自身が学習結果に満足を得ることができたようである。また、話せるようになったことを実感し、興味の広がりを見せたことは授業の運営からも成果であったと言える。

一方、宿題や小テストがかなりの負担だったことは、クラス運営での講師のコントロールの大きさを示しており、講師による確認作業がなければ学生は予習復習を行わなかったであろうことも推測できる。反面、講師の励ましや学生とともに発話練習を行うことが学習意欲に繋がったという学生のコメントもあるが、この点において講師のコントロールがどのように必要なか考えなければならない。

### 3. 5. 総合評価

アンケートおよびコメントの分析から、今回の新しい授業の試みは学生から一定の評価を得たとと言える。「会話」をしたいという学生のニーズに答え、場面会話を一つ一つ確認作業をしながら使えるように授業を進めたことは、「大変だったけれど、楽しかった」という学生の評価である。「作文」の学習を希望する者の増加は、書くことによる確認が学生自身によって行えた満足感の表れと考えられる。また、スペイン語に対する興味が増えた学生は43.6%になる。興味の広がりも、コメントから具体的に表われていた。授業以外の学習時間の増加は、学生も頑張って勉強をした証拠であるだろう。

講師2人による学生たちに対する成績評価は、2008年度に比べ平均的に高くなった。また、セメスターの途中で授業放棄をした学生が少なかった。最後の試験では、場面会話の筆記試験回収後自己紹介文を書かせたところ、多くは20文程度で家族のことや趣味、夏休みの予定など場面会話から応用して各人の紹介としてまとまっていた。授業中に作文指導はほとんど行わなかったため、語彙が少なく学生同士同じような表現も当然みられるが、授業で取り上げなかった語彙をテキストから探し出して応用している例も見られた<sup>(23)</sup>。

今後の課題として問題点を挙げたい。教材の細かな不手際や、教室運営の手順などの工夫の余地は十分にあるが、ここでは次につなげる学習意欲に関して2点指摘したい。第一はテキストの問題である。場面会話の教材が1セメスターの授業としては、限られた授業時間内で明確な目標設定として適切であったと思われ、学生の評価も高かった。しかし、内容の応用が少ない。より多くの表現を学習したい学生には、テキストを参考に自分で学習をするよう授業でヒントを与えるなどの配慮はしたが、学生自身がテキストを読んで内容を広げ、自己紹介文に応用できた例は6、7名で少ない。もっと文法を学習したかったというコメントもいくつかある。今回は文法の内容にあまり深入りせずに授業を進めることに重点を置いた。テキストは従来使用しているもので、それに場面会話を加えたが、時間的制約がある授業ではより自主的な学習もできるようにするためにも、2つの教材が

(23) 平均すると100語程度の内容としてまとまっており、150語を越す作文もあった。

よりかみ合うようなテキストが必要であると考え<sup>(24)</sup>。余力のある学生には、自分でも学習を進められる環境を作らなければならない。そこから、次の学習意欲に繋がるのではないかと思う。

第2は、今回は授業運営全体が全く教師主導型であった。場面会話の範囲や語彙の範囲を限定し、毎週小テストや宿題でコントロールをしたことである。最終的に講師の強いコントロールがあったことで、学生は学習できたことを認識しているであろう。教える側としても毎回2クラス78名の学生の確認作業にはエネルギーが必要であった。学生を励ましつつ、教える側の熱意は伝わったのであろう。しかし、松田が言うところの教師主導型を望む消極的な学生として教師自身が学生を扱い<sup>(6)</sup>、教師が勉強の方向性を指示したとも言える。もうこれで十分だ、と感じている学生がいることも想像できる。Iのレベルだけで、II、IIIのレベルへの学習意欲を高めることもできたのか疑問が残るところである。

#### 4. 結論および今後の課題

大学の現状と学生の視点やニーズに基づき、初習のスペイン語Iの授業を1セメスターという短時間で一つの完結した授業として明確な目標を与え、「話すこと」と「書くこと」を中心にした場面会話の教材を作成して授業を試みた。語彙や文法の知識を会話にして「話すこと」を「経験する」ことができ、限られた知識を総動員して、単なる暗記ではなく「推論する」ことから自己紹介文を「書くこと」ができた。「話すこと」「書くこと」は「聞くこと」「読むこと」に対し、主体的に自らが作りだす行為であることから<sup>(25)</sup>、学生はより実感がともなった学習ができたと思う。授業は学生からも高い評価を得ることができ、学習時間の増加やスペイン語の興味の広がりから学習意欲を高めることができたと言える。

(24) テキストに関しては、(3)の拙論でも指摘したように視覚的にも十分に丁寧な文法解説が必要である。丁寧な文法解説というのは一つの文法項目を掘り下げて詳しく説明するのではない。そのレベルに応じた解説を丁寧に書いておくということが重要である。

そのためには、ヨーロッパ言語共通参照枠『Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment』(以下CEF)およびそれに準拠して作成された Instituto Cervantes の、スペイン語のためのレベル別参照リスト『Plan curricular del Instituto Cervantes - Niveles de referencia para el español』が参考になる。コミュニケーション言語行動を実現するために必要な素材の記述を集め、CEFの考え方や基準に沿ってまとめたものである。これらを参考にして、一つの文法項目を入門、初級、中級レベルで扱う内容を徐々に高めていけばよいと考える。

Council of Europe (2002) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. 3rd printing, Cambridge University Press

吉島茂・大橋理枝訳・編 (2004) 『外国語教育II 外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠』, 朝日出版社

Council of Europe (2002) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. <[http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Source/Framework\\_EN.pdf](http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Source/Framework_EN.pdf)>

Instituto Cervantes (2007) *Plan curricular del Instituto Cervantes - Niveles de referencia para el español*. Editorial Biblioteca Nueva

(25) CEFによると、「話す・聞く・読む・書く」の4技能は、コミュニケーション言語活動におけるコミュニケーション事象とみなされ、「話す・書く」ことは産出活動、「聞く・読む」は受容的活動、会話などのやり取りは相互行為活動と分類している。つまり、授業で中心とした「話すこと」と「書くこと」は、学生自らが産出しなければならない。「聞くこと」や「読むこと」に比べると、学生は授業で行った行為が実感として受け入れられたのではないかと想像する。

しかし一方で、今後に向けての学習意欲については反省すべき点もある。この学習のプロセスでは教える側のコントロールが強かったために、学生自身が経験した「気づき」であっても<sup>(26)</sup>、その「気づき」が学生自身のものとして学生に積極的な学習を促すには不十分であったと思う。教える側と学ぶ側が互いによく合意し、協力し合える授業に向けていく必要があるだろう。テキストの見直しとともに、教師主導型から学生の積極的な学習を促す授業への工夫を考えねばならないだろう。

また、Ⅱ、Ⅲレベルの目標を具体的で明確にすることも必要である。時間的制約が大きいので、広く目標を定めるべきではない。例えば、Ⅱレベルでは少し文法を中心とした学習に切り替えてスペイン語の検定試験を目指す目標や、観光に使えるようにより現実に近い場面を設定し、話す相手によって使い分ける会話表現を学ぶ目標、Ⅲレベルでは歴史文化などに視点を向けて、いくつかのトピックを読むことでスペインからラテン諸国について知識を得るような目標をおくことが考えられる。「話す・聞く・読む・書く」をまんべんなく学習するというのではなく、それぞれ特徴のある具体的な目標が学生に提示できれば、Ⅰレベルからの学習計画を学生自身がより想定しやすくなるであろう。このようにできることは選択制の語学の利点であると考えられる。

今後もこれらの課題について研究を続け、よりよい授業を目指していきたいと思っている。

## 謝辞

本研究の「新たな試み」において、もう一人のクラス担当講師の寺沢セシリア恵子先生には全面的なご協力をいただきました。この場をお借りして御礼を申し上げます。

---

(26) 土屋 (1994) では、「経験する」「推論する」行為を含む学習の5原則および指導の3原則はその根底にある「学習プロセスの重視」「学習者における気づきの重視」に支えられており、指導者と学習者がこれらの原則について合意し、協力し合って初めて効果的な指導と学習が期待できるのである、という。また、学習していくプロセスで、語の新しい意味や用法に気づいたり、あたらしい文法規則に気づくことが重要であり、この学習者における「気づき」こそが真に生きた知識になる、と述べている。今回の授業では、学生との合意や協力の点で、講師のコントロールの仕方に改善すべき余地があったと思う。



<資料1>

**第1回アンケート集計結果[抜粋]**

回答者数：2008年度 79人、2009年度 76人

\* 2008年度春期、2009年度春期ともに同じ質問をした。

(単位：人数)

- ③ なぜスペイン語を選択しましたか。(2つまで複数回答可)
- |                         |                         |
|-------------------------|-------------------------|
| a. スペイン・中南米に旅行・留学がしたいから | (2008年度 26 / 2009年度 12) |
| b. スペイン・中南米に興味があって      | (30 / 26)               |
| c. スペイン語が日本人にとって易しいと思って | (11 / 18)               |
| b. とりあえず単位が必要なので        | (14 / 16)               |
| c. 将来役に立つと思って           | (29 / 32)               |
| d. 話者が多い国際言語だから         | (22 / 26)               |
| e. その他                  | (14 / 6)                |
- ④ 授業では、どの技能に重点をおいて勉強したいですか。(1番 / 2番 / 3番 / 4番)
- |                      |                 |                 |                |
|----------------------|-----------------|-----------------|----------------|
| a. 話すこと              | b. 聞くこと         | c. 読むこと         | d. 書くこと        |
| 2008 (51/ 20/ 5/ 3)  | (19/ 42/ 8/ 10) | (7/ 12/ 45/ 15) | (2/ 5/ 21/ 51) |
| 2009 (46/ 11/ 11/ 6) | (17/ 45/ 6/ 6)  | (11/ 9/ 43/ 11) | (0/ 9/ 14/ 51) |
- \* 順位で回答せずにひとつだけ○をつけた回答は除いた。
- ⑥ 授業では、次のどの分野に重点をおいて授業をしてほしいですか。(1番 / 2番 / 3番 / 4番)
- |                     |                 |                 |                 |
|---------------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| a. 会話               | b. 文法           | c. 訳読           | d. 作文           |
| 2008 (59/ 10/ 5/ 2) | (10/ 39/ 18/ 9) | (6/ 17/ 38/ 15) | (1/ 10/ 15/ 50) |
| 2009 (48/ 12/ 9/ 2) | (12/ 22/ 30/ 7) | (11/ 32/ 23/ 5) | (0/ 5/ 9/ 57)   |
- \* 順位で回答せずにひとつだけ○をつけた回答は除いた。
- ⑨ スペイン語を授業以外で、どのくらい勉強したいと思いますか。
- |                   |           |
|-------------------|-----------|
| a. 全然するつもりはない     | (1 / 4)   |
| b. 試験の前だけする       | (6 / 7)   |
| c. 宿題と試験の前だけする    | (30 / 36) |
| d. 授業の前日に予習と復習をする | (19 / 13) |
| e. 毎日少しずつする       | (23 / 16) |

**第2回アンケート集計結果A[抜粋]**

回答者数：2008年度 69人、2009年度 78人

\* 2008年度春期、2009年度春期に行ったアンケートのうち、同じ質問をした回答。

(単位：人数)

- ② スペイン語の授業は難しかったですか。 a. はい (54/59) b. いいえ(2/7) c. どちらでもない (13/12)  
何が難しかったですか？(複数回答可)
- |         |         |         |        |        |
|---------|---------|---------|--------|--------|
| a. 発音   | b. 語彙   | c. 文法   | d. 会話  | e. 訳読  |
| (17/19) | (20/33) | (42/46) | (9/18) | (12/0) |
- ⑤ スペイン語を授業以外で、どのくらい勉強しましたか。
- |                      |           |
|----------------------|-----------|
| a. 全然しなかった           | (2 / 2)   |
| b. 中間・期末試験の前だけしている   | (5 / 14)  |
| c. 宿題と、中間・期末試験の前だけした | (49 / 28) |
| d. 宿題と、授業前に予習復習をした   | (11 / 29) |
| e. 毎日少しずつ宿題や予習復習をした  | (2 / 5)   |

学習意欲を高めるスペイン語授業の一考察

- ⑧ これからの授業では、次のどの分野をもっと勉強したいですか。(1番 /2番 /3番 /4番)
- |                     |                  |                 |                 |
|---------------------|------------------|-----------------|-----------------|
| a. 会話               | b. 文法            | c. 訳読           | d. 作文           |
| 2008 (40/ 12/ 8/ 4) | (20/ 30/ 9/ 5)   | (4/ 14/ 35/ 11) | (0/ 8/ 12/ 44)  |
| 2009 (51/ 15/ 8/ 2) | (13/ 32/ 17/ 14) | (9/ 19/ 28/ 20) | (3/ 10/ 23/ 40) |
- \* 順位で回答せずにひとつだけ○をつけた回答は除いた。

**第2回アンケート集計結果B [抜粋]** 回答者数：2009年度78人

\* 2008年度春期、2009年度春期に行ったアンケートのうち、2009年度春期の学生のみに質問をした回答。

(単位：人数)

- ① スペイン語 I を学習して、スペイン語に興味がわいてきましたか。
- |                 |      |
|-----------------|------|
| a. 初めから興味がある    | (32) |
| b. もっと興味わいてきた   | (34) |
| c. 初めより興味がなくなった | (5)  |
| d. 初めと変わらない     | (7)  |
| e. 初めから興味がない    | (0)  |
- ③ 今回、スペイン語の授業ではテキストと、コピーの会話文と会話練習を使いました。そこで、コピーの会話文と会話練習のプリントの内容について質問します。
- a. 面白かったですか? [ 面白い・まあ面白い・あまり面白くない・つまらない ]  
( 29 / 41 / 7 / 0 無回答 1 平均値 3.29 / 4.00 )
- b. 役に立ちましたか? [ 役立つ・まあ役立つ・あまり役立たない・全然役立たない ]  
( 55 / 21 / 2 / 0 無回答 0 平均値 3.68 / 4.00 )
- c. 理解できましたか? [ 理解できた・だいたいできた・少しできた・理解できなかった ]  
( 27 / 36 / 14 / 1 無回答 0 平均値 3.14 / 4.00 )
- d. 他の会話練習をしたかったですか? [ はい (12) ・いいえ (66) ]  
( 旅行、買い物、道案内、食事、空港などの旅行会話、日常会話を希望している )
- ④ 授業の進め方について質問します。
- a. 覚える単語は多かったですか? [ 多い・少し多い・ちょうどよい・ちょっと少ない・少ない ]  
( 11 / 37 / 26 / 3 / 1 無回答 0 平均値 3.69 / 5.00 )
- b. 覚える会話は多かったですか? [ 多い・少し多い・ちょうどよい・ちょっと少ない・少ない ]  
( 20 / 29 / 29 / 0 / 0 無回答 0 平均値 3.88 / 5.00 )
- ⑤ 文法とテキストについて答えてください。
- a. 文法の説明はどうでしたか? [ 多い・少し多い・ちょうどよい・ちょっと少ない・少ない ]  
( 1 / 13 / 42 / 19 / 3 無回答 0 平均値 3.12 / 5.00 )
- b. テキストは予習復習に使いましたか? [ 使った・少し使った・あまり使わなかった・使わなかった ]  
( 9 / 31 / 26 / 12 無回答 0 平均値 2.47 / 4.00 )
- ⑥ 今学期は毎回小テストをしましたが、どう思いましたか。
- |                            |      |
|----------------------------|------|
| a. 毎回覚えるのが大変で、いやだ。         | (22) |
| b. 初めは嫌だったが、だんだん慣れてきた。     | (27) |
| c. 自然に予習や復習をすることになって、良かった。 | (24) |
| d. やってもすぐに忘れるので、意味がない      | (3)  |
| e. その他 _____。              | (2)  |
- ⑧ 今回の授業について、いろいろな感想を聞かせてください。

<資料2> プリント教材「場面会話」

**LECCION 1**

**Conversación 会話練習** 次のあたらしい会話を覚えて、前の課でおぼえた会話につなげて練習しよう。

A: ¡Hola! ¿Cómo estás?	やあ。いかがですか？
B: <i>Muy bien</i> , gracias. ¿Y tú?	とても元気です。君は？
A: <i>Bien</i> , gracias. <i>Me llamo ....(自分の名前)</i> .	元気です、ありがとう。私は(自分の名前)です。
¿Cómo te llamas?	お名前は何ですか？
B: <i>Me llamo ....(自分の名前)</i> .	私は(自分の名前)です。
A: Encantado. (男性が言うとき)	どうぞよろしく。
B: Encantada. (女性が言うとき)	どうぞよろしく。
A: Adiós.	さようなら。
B: Adiós, hasta mañana.	さようなら、また明日。

**Vocabulario 新しい言葉** 言えるように書けるように覚えよう。

estar	～です。[動詞]	活用: estoy, estás, está, estamos, (estáis), están		
muy	とても	bien 元気だ mal 悪い		
cansado	疲れている	regular 普通だ más o menos まあまあだ、だいたい		
mi	私の	tu 君の tus padres 君の両親		
padre	父	madre 母 mis padres 私の両親		
seis	siete	ocho	nueve	diez
6	7	8	9	10

**LECCION 6**

**Conversación 会話練習** 次の会話を覚えて、友達と練習しよう。

(En la universidad)	(大学で)
A: ¿ <i>Adónde</i> vas?	どこへ行くの？
B: <i>Voy al</i> salón de idiomas extranjeros. ¿Y tú?	外国語ラウンジへ行くよ。君は？
A: Voy a la biblioteca.	僕は図書館へ行くんだ。
Leo libros de Sudamérica.	南米の本を読むんだよ。
B: Yo aprendo inglés con mis amigos.	僕は友達と英語を習うんだ。
<i>Voy a viajar</i> a Australia.	オーストラリアへ旅行するつもりなんだ。
A: ¿ <i>Cuándo</i> ?	いつ？
B: Voy a viajar en las vacaciones de verano.	夏休みに旅行するつもりだよ。
A: Yo voy a viajar a Sudamérica.	僕は南米に旅行するつもりなんだ。
B: ¡Qué bien! ¿Cuándo?	いいなあ！ いつ？
A: No sé. Pero voy a viajar algún día.	分からない。でも、いつか旅行するつもりだよ。

**Vocabulario 新しい言葉** 言えるように書けるように覚えよう。 \*動詞は活用形を覚えよう

ir	行く [不規則動詞]	leer	読む[-ER 動詞]	aprender	習う[-ER 動詞]
al=a+el	(省略形)	el salón	ラウンジ	idiomas extranjeros	外国語
la biblioteca	図書館	el libro de	～についての本	Sudamérica	南アメリカ
ir a + 動詞	～しに行く、～つもりだ	viajar	旅行する[-AR 動詞]	Australia	オーストラリア
las vacaciones	休暇	¡Qué bien!	いいなあ!	No sé.	私は知らない
algún día	いつか	el periódico	新聞	la revista	雑誌